二〇二四年度　大阪星光学院高等学校　入学試験問題

国語

（その１）

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大学で芝居を始めたばかりの佐々木飛鳥は、ある時、新国際劇場の初演となる芝居のオーディションに参加する。最終審査まで残った飛鳥だったが、舞台女優になることへの決心がつかず、最終審査を辞退し観客席で他の演者の演技を見ていた。最終審査の課題は、天才の名をほしいままにする女優、東響子が演じる一人芝居にあわせて「影」の役を自由に演じるというものであった。以下は、審査が全て終了した後の場面である。

「お疲れさまでした。以上でオーディションは終了いたします」

＊1影山がそう宣言した時、ハッとした人間が三名いた。

一人は＊2神谷である。

響子と＊3葉月の演技に感動していたものの、影山の宣言に、彼はいっぺんに正気に返った気がした。

あの子は？　あの子はなぜ出ないんだ？

神谷は思わずきょろきょろと周囲を見回していた。しかし、周囲は皆今の演技に対する賞賛を口にしているだけで、影山の宣言の意味するところに気が付いているようには見えない。

神谷は、A期せずして猛烈な焦りが込み上げてきたことに驚いた。

困る。ここまでの候補者で決められてしまっては困る。これでは納得できない。

神谷は焦りながらも、もう一方ではその理由を冷静に分析していた。

今の演技は完璧だった。オーディションなのに、通しでやったわけではないのに、強く胸を打たれ、感動した。葉月の「影」も素晴らしく、このままでもすぐに商品として売ることができる。

しかし、俺が観たいのはこれではない。

どこかでそう声が囁く。

この先にある何かが観たいのだ。

何かってなんだ？　この先って？

そう誰かが尋ねるが、神谷には答えることができない。しかし、何かがあるはずだ。ここまで来られたからには、まだ先がある。

そこまで行かなければここまで来た意味がない場所が。そして、それを実現できるのは――

頭にぼんやりとその少女の姿が浮かんだ。

影山のオーディション終了宣言を聞いて、東響子も我に返った。

今の演技の衝撃と、＊4ブランチから抜け切れなかった身体が、突然現実に戻ってきた感じだ。

オーディション終了ですって？　あの子は？

響子も辺りを見回す。客席の真ん中の候補者たちの席を見るが、やはり姿はない。

来られないのか。それとも辞退したのか。

響子はB愕然とした。

あの子の演技が見られない。あの子と舞台に立てない。

そう胸の中で呟いてみると、その落胆の大きさに驚いた。実は、あの子と舞台に立つことを、自分がどんなに楽しみにしていたか、今初めて気付かされたのだ。全く異なるベクトルのうまさ、全く未知のうまさを持った同年代の少女と絡むことに、自分が多大な期待を抱いていたことを。

響子は怒りすら感じた。

今の舞台、今の演技で何かをつかみかけた。「何か」はあまりにも巨大で、その影をチラリと見た程度のものではあったけれど、これまでは想像することしかできなかったものが、本当に存在することを確かめることができたのだ。

ここで終わってしまっては駄目。もう一度、今ここで繰り返してみなくては。

響子は呪文のようにそう口の中で呟いた。

（その２）

次にブランチとして舞台に立てるのはいったいいつになるのか分からない。あの感覚は、役者にとって、一生に一度訪れるかどうかも分からない＊5僥倖（ぎょうこう）のようなものなのだ。今舞台を降りてしまったら、魔法は解けてしまって、あの感覚を思い出すこともすぐにできなくなる。だから、ここで。今ここでもう一度やりたいのに。

響子は鼓動が激しくなるのを感じた。

自分にはどうしようもないことは分かっている。それでも、彼女はあきらめきれなかった。

そして、もう一人ぎくっとしたのは＊6梶山巽（かじやまたつみ）だった。

オーディション終了。

目の前で扉が閉じていく。佐々木飛鳥が、彼が天才だと確信している少女が、東響子と共にブランチを演じるという、恐らく二度とは訪れないチャンスが消えていこうとしているのだ。そして、来年には、話題となった新国際劇場の舞台を、彼らはただの学生演劇のアマチュアファンとして、客席から眺めることになるのだ――巽には、その情景が目に浮かんだ。その他大勢の、芝居好きの学生として、口を開けて舞台を見上げている自分たちの姿が。

それでいいのか。それで本当にいいのか。

巽は、泣きたいような気分で隣の飛鳥を見た。

こいつ、天才のくせに、馬鹿じゃないのか。

そう心の中でa罵った瞬間、ふと、巽は彼女の指を見た。

前の座席をつかんでいる両手。

彼女は、凄（すご）い力で座席をつかんでいた。よく見ると、指がぶるぶる震えている。

その指を見た瞬間、①巽は、頭を思いっきり殴られたような気がした。

こいつ。こいつ、やっぱり。本当は。本当は、きっと。

ぐるぐると頭の中でいろいろな言葉が渦を巻き、これまでに見た飛鳥の演技が次々と蘇（よみがえ）る。

客席からは、感動冷めやらぬスタッフが立ち上がりかけていた。緊張から解放されたあとの、心地好（よ）い喧騒（けんそう）が場内に漂い始める。

巽は深く息を吸い込み、立ち上がって大きく舞台の影山に向かって手を振った。

「待ってください！　もう一人います！　もう一人、候補者います！」

劇場内が静まり、みんなが一斉に巽を振り返った。

舞台の上の影山も、bソデのほうにいた東響子も。

もちろん巽も役者だし、日頃から喉（のど）も腹筋も鍛えている。

それでも、みんなが自分の方を見ているのに気付いて、一瞬びびってしまった。

＊7新垣（あらがき）も、ただでさえでかい目を更に見開いて、巽を見上げている。

「巽、おまえ」

新垣は、口をもごもごと動かしていたが、言葉が続かなかった。

が、もはや後には引けない。

巽は、隣でぽかんとして彼を見上げている飛鳥の腕をつかみ、無理やり立たせた。

「こいつです！　佐々木飛鳥です！　よろしくお願いします！　これから、『影』のブランチやります！　お願いします、もう一人、見てください！」

巽は更に大声を張り上げた。

負けない。こいつなら絶対に負けない。

声を張り上げるにつれ、一層闘志が湧いてくる。

みんな、見ろ。こいつの演技を見てくれ。

突然、腕をつかまれて立たされた飛鳥は、いきなり現実に引き戻されて、一瞬何が起きたのかさっぱり分からなかった。

しかし、巽が自分の名前を叫んでいるし、みんなが振り返って自分を見ている。

飛鳥はぼんやりした目で巽と客席に目をやるばかりである。

が、射るような視線が自分に向けられていることに気付き、のろのろとそちらに目をやった。

東響子が、飛鳥を見ていた。

（その３）

その視線が自分を捕らえていることに気付いた瞬間、飛鳥は[c]カクセイした。
落雷にでも遭ったみたいだ。
なんという強い視線。飛鳥の姿を客席に認めた響子の目は、遠く離れているのに、思わずよろけてしまいそうなほど激しかった。
響子もまた、客席で若い男の子が腕を引っ張った少女があの子だと気付いた瞬間、遠いところにいるのに、その目に視線が吸い寄せられるのを感じた。

あの子が、あたしを見ている。

あのスタジオで、初めて会った時とは違う。互いを役者として認めた目、同じ世界に生きる者どうしとして認め合った目だった。
響子は少女を睨（にら）みつける。
さあ、来てよここに。あたしはもう一度、あの感覚を味わわなくてはいけないの。あなたはそれに協力してくれなければならないの。だから、早くここに来てちょうだい。
彼女は祈るような気持ちでそう少女に話し掛けていた。
早く早く。そうしないと、あの感覚が消えてしまう。
響子は客席に降りていって、腕を引いて連れていきたい衝動を必死に抑えた。
「佐々木飛鳥さん、ですね。確かに最終候補者ですが、辞退したと聞いていましたが。本当に、オーディションに参加する気があるんですか？」
舞台の上の影山が、用心深い声でそう尋ねた。
「参加する気があるのならば、着替えの間、二十分の休憩にしますが」
その声は[d]カイギ的である。
再びみんなの視線が飛鳥に集中する。
飛鳥は俯（うつむ）き、おどおどしたようにその場で棒立ちになっていた。
結局のところ、飛鳥を動かしたものは、やはり東響子だった。
彼女はまだ響子の演技を反芻（はんすう）しつつ＊8南部の町の中にいたので、自分の置かれた状況がよく理解できていなかった。なぜいきなり巽が大声で叫び出したのか、どうしてみんなこっちを見ているのか、理解するまで少し時間が掛かった。
あそこにブランチがいて、あの人はその奥を知っている。
頭の中ではそんな考えがぼんやりと渦巻いていたが、そのブランチが突然叫んだので、彼女はびっくりした。

「②急いで！　時間がないのよ」

響子が目を見開いてこちらを見ている。おまけに、彼女は大きな身振りで手招きをした。
驚いたのは飛鳥ばかりではなかったようで、響子の隣にいた影山や、客席にいた神谷や巽も驚いた。
怒っているのかな？　と巽は思った。長々と何度も演技をさせられて、更にもう一回やらされるのだから、怒っても仕方がない。
こんな大スターを怒らせるなんて。
「ほら、行け！　早く！」
慌てて隣の席の飛鳥を押し出そうとする前に、彼女が歩き出していたのでハッとした。
伸ばした手が宙を泳ぐ。
「佐々木」
飛鳥は小走りに出て行った。もはやためらう様子もなく、いつも通り[e]キビンに。
「佐々木」
巽は伸ばした手をちょっと動かしてから下ろし、もう一度口の中で呟いた。
飛鳥が遠くに見えた。その背中が、舞台の光に溶け込んでいく。
③やっぱり、あいつはあっちの側の子だったんだ。舞台の上の、高みのほう。
そんな感慨と、淋（さび）しさとが同時に湧いてくる。
行っちまった。
彼がこの瞬間のことを何度も思い出すように、飛鳥もこの時のことを後から何度も考えることになる。彼女が何かに向かって歩き

（その４）

（恩田陸（おんだりく）「チョコレートコスモス」より）

出した瞬間、東響子の声を聞いて、東響子に向かって進み始めた瞬間を。

＊１　影山…今回のオーディションを取り仕切っている演出家。
＊２　神谷…脚本家。新国際劇場の初演となる芝居の脚本を書くことになっている。
＊３　葉月…響子より六歳上の実力派の女優。響子とは遠い親戚にあたる。
＊４　ブランチ…東響子がオーディションで演じている芝居の役名。
＊５　僥倖…思いがけない幸運。
＊６　梶山巽…飛鳥と同じ大学の劇団に所属する劇団員の一人。劇団の脚本も書いている。
＊７　新垣…梶山巽と同じく、大学の劇団に所属する劇団員の一人。
＊８　南部の町の中にいた…ここでは、響子が演じた芝居の世界の中に浸っていたということ。

問１　――線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直し、漢字にはその読み方をひらがなで書きなさい。

問２　――線部Ａ・Ｂの本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

Ａ「期せずして」
ア　無性に
イ　抑えきれず
ウ　人知れず
エ　思いがけず
オ　いきなり

Ｂ「愕然とした」
ア　非常に驚いた
イ　怒りを覚えた
ウ　がっかりした
エ　我を忘れた
オ　大変困惑した

問３　――線部①「巽は、頭を思いっきり殴られたような気がした」とありますが、それはなぜですか。八十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問４　――線部②「急いで！　時間がないのよ」とありますが、ここから読み取れる響子についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　飛鳥が舞台女優への決心がつかないと知り、彼女に多大な期待を寄せていた自分にいら立ちを覚えていたが、若い男の子に促される飛鳥を見て、先程の葉月との演技で少しだけ見えた演技の深遠を共に見ようと思い直し、あえて挑発的な物言いをすることで飛鳥が自分に挑んでくるように仕向けている。

イ　今の舞台でつかみかけている何かを自分のものにするためにも、飛鳥との演技を期待していた響子だったが、最終審査を辞退してぼうっとしている飛鳥を見て、腕を引いて舞台に連れて上がりたい衝動を必死に抑えていたものの、ついつい声を荒げていら立ってしまっている自分に驚きを隠せずにいる。

ウ　響子は葉月との演技でつかみかけた感覚と同じものが飛鳥との演技で得られると思っていたのに、それが叶（かな）わず落胆していたが、再び目の前に現れた飛鳥の姿を認めると、先程の感覚が消えないうちに、一刻も早く飛鳥と演技をして演技の真髄のようなものをつかみ、一段高みへ上りたいと気が急（せ）いている。

エ　候補者の中に飛鳥の姿が無いことを知った響子は、葉月との間で得た魔法のような感覚を飛鳥と共有できないと思いがっかりしていたが、観客席から立ち上がり、自分をじっとみつめる飛鳥の姿を認めると、すぐにでも二人で演技を行って、飛鳥にも演技の奥深さを実感してほしいと決意を新たにしている。

オ　未知のうまさを持つ飛鳥との演技を響子は楽しみにしていただけに、共演できないと分かりショックを受けていたが、観客席で人の気も知らずにおどおどしている飛鳥の様子を目にすると、一刻も早く彼女を正気に戻して舞台に上げ、葉月との演技を超える演技が二人でできるようにと躍起になっている。

問5　――線部③「やっぱり、あいつはあっちの側の子だったんだ」とありますが、この時の巽の気持ちとはどのようなものですか。百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問6　この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　「あの子は？　あの子はなぜでないんだ？」（7行目）や「オーディション終了ですって？　あの子は？」（24行目）という表現から、飛鳥のつかみきれない性格に、周りが振り回されている様子がうかがえる。

イ　「周囲は皆今の演技に対する賞賛を口にしているだけ」（8行目）や「感動冷めやらぬスタッフ」（58行目）という表現から、周囲のスタッフ達は皆、飛鳥より葉月の方が適役だと考えていることが分かる。

ウ　「ぼんやりした目」（81行目）と「射るような視線」（82行目）という表現は、舞台に上がるという現実を飲み込めずにいる飛鳥の戸惑いと、飛鳥との共演を強く望む響子のいら立ちを、対照的に描いている。

エ　間を一行空けることによって、場面の転換を示すだけではなく、大事なセリフを読む前に間を与えるような役割をすることで、読者も登場人物の一人になったような感覚を味わうことを可能にしている。

オ　三人の視点から飛鳥について描くことで、特異な才能を持つ飛鳥に注目している人がいることを浮かび上がらせ、飛鳥が舞台女優としての一歩を踏み出すことになる経緯を読者が読み取れるようにしている。

（その5）

二、この文章は雑誌『ちゃぶ台⑨』に掲載された文章を抜粋したものです。次の文章を読んで後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分があります）。

＊1カーシェアリングや＊2ワークシェアリングという言葉にみられるように、シェアという言葉にはなにか人をつないでいくような前向きなニュアンスが含まれている。

私たちがシェアに可能性を感じるのは、現在の日本社会で「分かち合い」「お互いさま」「おすそわけ」の精神がaスイジャクしているからだろう。あらゆるものが個人消費の対象になり、個人の地位と財産は個人の責任に還元され、それゆえに、社会的孤立に追い込まれる無縁社会が広がっている。それと＊3踵（きびす）を接するように、ものとの縁も薄くなっている。一度使ったら捨てることが多くなり、それが地球の分解機能に負担をかけている。いま、シェアの意義が頻繁に語られる背景には、人間と人間のあいだ、人間と自然のあいだの「無縁」の広がりがあるのだと思う。

そう考えると、シェアの復権は必要だ。しかし、他方で「シェア」の源流をさかのぼっていくと、それはそんなにやさしくて、あたたかくて、美しいものではないことがわかる。ここで私はシェアの思想を鍛え直してみたいと思う。一度、そのマイナスの面を凝視することで、bリンカクを溶かし、床で再び打ち直してみよう。そんなにシェアは甘いもんじゃないですよ、というところから始めたい。

たとえば、ケーキを八等分したり、リンゴを四等分したり、焼き芋を半分にしたり、食べものを分かち合うことは、ホモサピエンスをほかの動物と分ける根幹的な行為だし、快楽をともなうことだが、集団食中毒事件にみられるように、同じお店や学校で食べたものが、その利用者の多くを苦しめることにもつながりうる。シェアするつもりのない微生物やウイルスや毒物までもシェアする危険性にたちまちさらされてしまう。

そして、シェアは紛争の根源のひとつである。ケーキや焼き芋の分配の失敗ならばせいぜい喧嘩（けんか）ですむが、地球の表面と大気をシェアする国際社会のありかたは、大急ぎで世界の歴史をふりかえってみても、残念ながら、やさしくて、あたたかくて、美しい感じとはほど遠い。［　I　］、流血をもたらし、家族を引き裂き、憎悪を掻（か）き立ててきた。英語の share とは、もともとは「分ける」という意味である。一体だったものを分割する。分割するからグループが生まれる。ドイツ語の Schar、つまり「集団」を意味する言葉と同源であるのもうなずける。

「分かち合い」を核とした経済システムの可能性を論じた＊4神野直彦（じんのなおひこ）の『「分かち合い」の経済学』が「現在の危機は『分かち合い』を『奪い合い』とされていることから生じている」という現状認識から出発しているように、共有は収奪と隣り合わせである。要するに、①「シェアする」は「巻き込まれる」と「奪い合う」という動詞と表裏一体なのである。

シェアを、過剰に美しいものとして論じてはならないと思うもうひとつの理由は、私たちが原則として身体をシェアできないからである。原則として、と留保をつけたのは、皮膚移植や輸血などのように、他人の体に自分の体の一部を使うことも、自分の体に他

（その６）

人の体の一部を使うことも、現在の医学では可能だからだ。［Ⅱ］、身体とはつねに外の自然世界との物質交換がなされつづけてようやくかたちをなす動的なものだから、輸血は、身体の共有というにはややあっさりした行為である。［Ⅲ］、もっとも良質な栄養を要求するわがままな臓器である脳は、私たちの精神生活と身体生活の中枢なのだが、現時点の医学では移植はできないし、それをシェアすることなど今後も不可能であろう。

だから、感情、感覚、認識などは、厳密にいえばシェアできない。似たような嗜好を持った者が同じ映画を観た場合、直後の感想では意気投合していたとしても、言葉を重ねていくうちに、それぞれが違ったとらえかたをしていることに気づき始めるだろう。

ということは、シェアとは、身体感覚の根源から揺るぎなく発せられる人間の本性ではない。どこかで作為が入ってくる。探り合いである。あえて挑発的な言いかたをすれば、それは化かし合いであり、ごまかし合いであり、[c]ダキョウの産物であり、自分をだますことでもあるのではないか。

そして、もうひとつ確認しておかなければならないのは、近代社会を生きる私たちは前提として、それぞれ誰にも代え難い、かけがえのない存在として規定されている、ということだ。

自分の私有財産が市場との結びつきが強くなることで、おいそれと共有できず、心も通い合わせることが難しい近代社会の中で、理性を行使して、超越者のまなざしや迷信を排しつつ、大きなものや強いものへの依存状態から脱しようとする近代のプロジェクトを「啓蒙」という。

そして、そのような自律した人間を「市民」と呼び、市民たちが、理性を用いて議論をする場を哲学・思想用語で「公共圏」と呼ぶ。この近代西洋市民モデルを教育課程で学びつつ、私たちは「いっぱしの市民」になろうと努力してきた。私たちは自律した人間になるべく、教育を受けてきた。計算を学ぶことによって、だれか[d]カシコそうな人に情勢の分析と判断を頼るのではなく、自分自身で考え判断できるようになる。読み書きを学ぶことで、誰かに代筆や代弁を頼むのではなく、自分の口と文で誰かに言いたいことを伝えることができるようになる。成人後も、言論空間を尊重して、他人と意見を交わし、怒りではなく、理性によって事が進むように努力する。

力を持つ者の暴力や言論が肥大化し、言論空間の歪みが著しくなりつつあるいま、啓蒙のプロジェクトが依然として必要であることはいうまでもない。いやむしろ忘れてはならない。依存先が複数あることが自律の証である、というのはそのとおりであるが、誰かに依存しやすい状態にするためにも、お互いに「自律しようとしている（がなかなかうまくいかない）人間だ」と認め合うことが必要であろう。人間の自律性を無視して、あからさまに権力を行使し意見を封殺するような人間に、自律した人間として他人と協力しながらきちんと立ち向かわなければ、みずからの生存が危うくなるような時代が、残念ながら私たちの生きている時代である。

個人の自律を無視したり軽視したりするシェアの思想、つまり、②シェアを試みる複数の人間が一体化してしまいすぎる考え方は、「力を過剰に持つ者」や「暴力に訴える者」に対して抵抗力が弱いと考える。

ここまで、シェアがいかに難しいかについて論じてきた。シェアは運命を共にするような覚悟が多かれ少なかれ担い手に求められるし、そもそもそのシェアが成功していると確信することは、ほとんど不可能に近いと考える。

けれども、人びとはシェアをやめられない。微生物による汚染のリスクや集団感染のリスクがどれほどあっても、シェアの調整が失敗して気まずい空気が流れる危険性がどれほどあっても、あるいは暴力に発展するかもしれないという予感が頭をかすめても、私たちはシェアをあきらめない。

それはなぜか。実は、その危険性そのものにシェアの本質があるのではないだろうか、と私は考えている。

少し話が逸れるが、前号の『ちゃぶ台８』で私は、世の「民営化」のほとんどが私営化にすぎず、本当の民営化は到来していない、と書いた。「民が営む」ことを、公共サービスを私企業に任せるという意味に歪曲してはならない、と主張した。民はそれだけでは国民ではない。「国民」として軍隊に入隊したり、国家の緊急事態に対して労働をしたりすることは、民が歴史的になしてきた行為であるが、民とは「国民」である以前に、誰かを誰かの命令で殺す謂れのない文民 civilian である。丸腰である。丸腰は、武器で[e]イカクする人がまわりにいる場合、無力であると思われがちだが、そうではない。基本は、トラやオオカミや台風や竜巻や洪水や地震や王様のご乱心など、危険なことや危険なものにいつも囲まれてきたので、よほどの権力者の家系でないかぎり、危険に対抗するための丸腰なりの知恵を蓄積してきた。現在のリスク管理社会が危険を民に感じさせないように試みているが、そうならないのはここ数年の世界的危機が私たちに示しているとおりだろう。いつもある大きな危険に対して、相対的に弱い危険（仲違いの危険や腹を壊す危険や風邪をうつし合う危険）をみんなで分かち合うことで防御する術を、民は学んで伝承してきたのである。

人間は、いまから口に入れるものは絶対に安全だ、という意識を持たずとも、食べものを料理したり、食べたりすることができる。毎回、冷蔵庫に入っているものや食卓に上がる食べものの毒味を、別の動物や支配下の奴隷にさせたり、微生物検査をさせたりはしない。そんなことより早く食べたい。家族の効能のひとつはこれではないか。食べものを毎回シェアすることで、毎回の毒味や検査や人への疑義を省略できる。まさに運命のシェアといえる。

一種の運命共同体として寄り添って定住することとそれによって生まれる富の一カ所への集中（つまり、生きる空間のシェア）は、感染症の危険性を高めるし、外部からの攻撃にさらされやすい。それでも、家族にせよ、村人にせよ、寄り添って住みたくなるのは、

（その７）

根源的には、シェアする喜びを味わうよりも③もっと消極的な（しかし根幹におよぶ）意味があった、ということに私は戻って考えたいと思う。大きなリスクから自分を逸らして誰かに受け取ってもらいつつ、場合によっては＊5脱文脈化して納得し、笑い、悲しむ。そんな消極的で不安たっぷりのシェアの感覚の上乗せとして、シェアの実践が有する快楽や社会変革の可能性が存在するのではないか。

私が言いたいのは、シェアの実践や思想の否定ではない。その逆である。シェアの思想の、「この状況ではシェアせざるをえない」「シェアは面倒だが、しておけば将来なにかの役に立つかも」という、大きな厄災を前提としたしたたかな感覚を経てようやく、シェアの持つ可能性をもっと大きく見積もることができると考える。

（藤原辰史（ふじはらたつし）「シェアの痛みから考える」より）

＊1　カーシェアリング…登録を行った会員間で車を共同で使用するサービスのこと。
＊2　ワークシェアリング…労働者の負担を減らし、仕事を分け合うこと。
＊3　踵を接する…つぎつぎと続くということ。
＊4　神野直彦…日本の経済学者。
＊5　脱文脈化…状況や背景から切り離して考えること。

問1　═══線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直しなさい。

問2　［Ⅰ］～［Ⅲ］に入る言葉として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度使えません）。

ア　そして　　イ　そもそも　　ウ　しかし　　エ　なぜなら　　オ　むしろ

問3　──線部①『シェアする』は『巻き込まれる』と『奪い合う』という動詞と表裏一体なのである」とありますが、どういうことですか。それを説明した次の文の空欄に合う内容を、五十字程度で答えなさい（句読点も一字に数えます）。

「シェアする」ことには、人々の孤立が進む社会で人をつないでいくような肯定的な面がありつつも、［　　五十字程度　　］という否定的な面もあるということ。

問4　──線部②「シェアを試みる複数の人間が一体化してしまいすぎる考え方は、『力を過剰に持つ者』や『暴力に訴える者』に対して抵抗力が弱い」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自律するための教育を受けた人間からなる今日の社会であっても、人々が意見を統一することにこだわるあまり、他人の意見を論破しようとするような人間が増え、それを恐れた人々が自分の意見を言えなくなってしまうということ。

イ　言論空間の歪みが著しくなりつつある今日の社会において、人々が他人と同じ意見ばかり持とうとすると、自分自身で考えて判断できなくなり、他人の意見を抑圧しようとするような人間に反発する力が弱まってしまうということ。

ウ　権力者の暴力や言論が肥大化する今日の社会において、人々が結束を深めようとしすぎると、かえって不安や恐怖までも共有することになり、他人の意見を弾圧しようとするような人間に対して立ち向かえなくなってしまうということ。

エ　自律した人間によって構成されている今日の社会であっても、人々が互いの権利を尊重しようとしすぎるあまり、本音で議論することが減り、他人の意見を抑圧しようとするような人間の影響を受けやすくなってしまうということ。

オ　お互いの心を通い合わせることが難しい今日の社会において、人々が意見の多様性を認めるあまり、自分自身の正当性を疑わなくなるだけでなく、他人の高圧的な意見であってもそのまま受け入れてしまうようになるということ。

（その８）

問５　――線部③「もっと消極的な（しかし根幹におよぶ）意味があった」とありますが、どういうことですか。九十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問６　この文章の内容についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　シェアの価値が頻繁に語られるようになってきたのは、あらゆるものが個人消費の対象になり、その結果地球に負担をかけていることに対して個人の責任が大きくなってきたからだ。

イ　現在の医学では体の一部を移植することはできるものの、身体感覚に根ざした体験をシェアすることが可能になる脳の移植は、いまだ実現するまでに時間がかかるとされている。

ウ　強大なものへの依存状態から脱するよう、近代において啓蒙された理性ある人間が、同じ言論空間をシェアすることで、再び近代以前のように超越者への依存状態に戻ってしまう。

エ　歴史的にみると、常に危険にさらされてきた人間は、国のために入隊や労働を行い見返りを受けてきたが、今後は危険から身を守るために国ではなくシェアという知恵に頼るべきだ。

オ　現在の社会ではシェアに含まれる可能性が注目されているが、その本質にある危険性にも着目して、人間の根幹に関わる意義を検証しない限り、シェアの思想を肯定することはできない。